

ネパールにおける職業カーストの分布と 銅鍛冶業の展開

——山地ヒンドゥー職人とネワール職人の関係——

南 真 木 人

はじめに

ネパールを旅していると、たいていの街(バザール)の片隅に職業カーストの職人たちの作業場や集落があるのに気がつく。農村においても、ある程度の人口規模をもつところでは、しばしば鍛冶の鋤音や手回しミシンの音、楽器の音色などが響いてきて、職業カーストの人びとの存在を知らせてくれる。職業カーストは特別の技術やサービスを農耕を主とするカーストや民族に提供しているので、これはある程度当然のことであろう。しかし、こうした印象から連鎖的に考えがちな「職業カーストはネパール全土に広く満遍なく分布している」という予測は、どの程度まで妥当性をもつのであろうか。

この小稿では、ネパールの山地における職業カーストの分布を資料として呈示する。そして、とくにネワールと山地ヒンドゥー教徒(いわゆるパルバテ・ヒンドゥー)それぞれの銅鍛冶カーストに注目して、ネパールの山地における銅器製法の展開を考察する。銅に注目するのは、いつからの「伝統」かは定かではないが、ネパールでは結婚式の贈答品として銅製の水入れ(gagri)が無くてはならず需要が高いこと、銅製のホルン(narsinga)が山地帯全域で楽師カーストの象徴的な楽器となっていることなど、銅製品が広くネパール全体に必要とされてきた、比較に適した素材だからである。また、銅と鉄は「銅、鉄、鉛はネパールで産出する主要な鉱石として、19世紀の重要な歳入資源であり、国内の需要を十分に満たした上、多少は輸出もされていた」(Sever 1993: 199)といわれるほど、国内で盛んに生産されてきた重要な資源であったからでもある。鉄については、ククリという鉈について簡単に紹介したので(南 1998)、ここでは取り扱わない。

人口分布の資料に利用するのは、1991年に行われた人口センサス(Central Bureau of Statistics 1993)である。このセンサスでは、これまでは項目としてなかった郡レベルのカースト及び民族集団別の人口が公表され、ネパール全体でのカーストや民族の分布が明らかになった。ここで取り上げるのは、主に山地に居住するヒンドゥー教徒の職業カースト集団であり、タラ

イに住む北インド系ヒンドゥー教徒の職業カーストは参考に用いる集団を除いて対象としない。資料の分析および考察には、これまで私が調査してきたナワルバラシ郡のマガル人地域の事例、「職人文化と近代化」研究会でおこなったパルバ郡チャハラ、ダディン郡B村、タナフ郡ダマウリ、ラリトプル郡パタン、バジャン郡のチャインプルからデュリにかけての予備的な調査に基づくデータと、他の研究者による報告を利用する。ドティ郡のシリガリドティには1985年に訪問した。

1. 職業カーストの自称名

ネパールの場合、ほとんどの職業カーストは1854年に制定されたムルキ・アイン(国の法典)に基づくカースト序列規定により、「不浄だが可触のカースト」ないしは「不可触カースト」に位置づけられてきた(Höfer 1979: 45)。こうした不可触観に基づく差別、ヒンドゥー寺院など公的な場所への立ち入り拒否などは、1962年の憲法、さらには1990年の新憲法によっても禁止されている。しかし、現実には職業カーストに対する日常的な差別は払拭されているとはいえない。これに対して、職業カーストの人びとはさまざまな解放運動に取り組んでいるが、その一つに旧来使われてきた蔑称的なカースト名を自称の別の名に変更するという運動がある。

例えば、一般にカミ(Kāmi)と呼ばれ、センサスでもそのように集計されている鍛冶師の自称はヴィショワカルマ(Vishvakarma)である。ヒッチコック(Hitchcock 1963: 79)によると、1961年の段階で、調査時の新たな動向として、カミはヴィショワカルマ神の子孫であるという言説が流通しはじめたという。この動向はその後、1977年当時、文部副大臣であった鍛冶師カースト出身のヒラ・ラル・ヴィショワカルマが、カミという姓を避けヴィショワカルマと名乗ったことを契機としカミ集団全体に広まった。

ヒンドゥー教の創造神であるヴィショワカルマ神は、とくに工具、機械(敷衍して自動車)などモノを作る道具を司る神格であり、近代的な工場でもこの神が祀られていることが多い。その意味では、鍛冶師カーストの名にふさわしい神格を援用して命名したといえるであろう。しかし、それは必ずしもヴィショワカルマ神が鍛冶師カーストの人々の信仰の対象であることを意味しない。鍛冶師の工具や鍛冶場、とくに金床で祀られるのは、「交易の神格ビムセン(Bimsen)やドウルガー女神」(Höfer 1976: 351)であったり、バジャン郡ではバードカロ神(Bādkalo)やバードパラ神(Bāḍpara)であり、たいていはヴィショワカルマ神ではないのである。

センサスの表記が今もってカミであることから明らかなように、この自称は公的にも他称として定着しているとはいえない。しかし、陰口ではともかく、本人を前にしてカミという言葉を出すことは、村レベルにおいても少なくなっている。ナワルバラシ郡北部のマガルの場合、カミ、ダマイ(仕立師兼楽師)、サルキ(皮細工師)という名は、面と向かってはそれぞれヴィショワカルマ、ネパリーまたはテラー・マスタルかダグジー、ミジャールに言い換えるべきだといわれている。もっとも、マガルの中には職業カーストとの間に義兄弟の契りを結んでいる人がおり、そうした疑似血縁関係をたどってみんながお互いを親族呼称で呼び合

うようになっている。そのため、こうした言い換え表現が聞かれる機会は減多にない。ティンゲイ (Tingey 1994: 88) によると、ゴルカ地方でもダマイ、サルキ、カミ、ガイネという蔑称は、それぞれバリヤール、ネパリー、ヴィシュワカルマ、ガンダルバーに置き換わってきているという。

名称問題は、最近になって多くの人に意識されだしたことではあるが、けっして新しい現象というわけではない。16～18世紀にかけて、極西部および中西部ネパールには「22王国」と総称される小王国の時代があった。その一つ元バジャン王国で、現バジャン郡の郡庁所在地チャインプルに住む金銀細工師(スナール)は、王に呼ばれて移住し王国のために働く代わりに、ミジャール (Mijhar) という尊称を使うことが許されたのだ、と今日においてもなお誇らしげに語る。

言い換えという対処療法で根本的な問題が変革できるという楽観論にたつわけではないが、本稿では必要な場合を除いて旧来のカースト名を使わず、職業名と自称を使うようにしたい。

2. 山地職業カーストの分布

2-1. 鍛冶師の分布

表1は、ネパール全体の主な山地の職業カーストの人口、その人口比、人口密度をあらわしたものである。後述するように、私はクマールはカーストではなく民族集団であると考えが、それを示すためにクマールと北インド系のヒンドゥー教徒カースト、クムハルも取り上げる。

さて、これによると、鍛冶師カースト(以下、鍛冶師)は山地の職業カーストの中では最も人口が多い集団で96万人に達している。その人口は全人口の5.2%を占め、1平方キロメートルあたり6.5人の鍛冶師が居住していることになる。これは、カミと総称される人の中に、狭義のカミないしは特にロハール (Lohar) と呼ばれる鉄鍛冶師、金銀細工師のスナール (Sunar)、銅鍛冶師のタモタないしはトマト (Tamota)、竹細工師、木地師なども含まれているからであると考えられる。極西ネパールのバジャン郡では、主にカゴや穀物入れを編む竹細工師はバルキー

表1 主な山地の職業カーストの人口、人口比、人口密度

カースト[民族]	人口 (1991)	人口比 (%)	1 km ² あたりの人口 (人)
鍛冶師(カミ)	963,655	5.2	6.5
仕立師(ダマイ)	367,989	2.0	2.5
皮細工師(サルキ)	276,224	1.5	1.9
土器職人[クマール]	76,635	0.4	0.5
土器職人(クムハル)*	72,008	0.4	0.5
楽師(パディ)	7,082	0.04	0.05
楽師(ガイネ)	4,484	0.02	0.03
総人口	18,491,097	100	126
総面積 (km ²)	147,181		

*クムハルは北インド系ヒンドゥー・カーストだが、クマールとの対比のために扱う。

(Parki)、木器や太鼓の胴などの楽器を人力で回すロクロで作る木地師はチャダーラー (Chadara) と呼び分けられているが、彼らも統計上は広くカミに分類されているのである。ネパール全体では、一般にカミとスナールの二つが区別されて呼ばれていることが多い。だが、西部ネパール以西では、タモタなどより細分化した下位カースト名も使用される傾向がある。

1991 年のセンサスによると、鍛冶師は郡の総人口が最も小さいマナン郡(5,363 人)の 78 人を最小に全 75 郡にわたって分布している。表 2 は、5 つの開発地区ごとの鍛冶師の人口と分布比、および鍛冶師の人口が多い上位 10 郡の人口と分布比を表したものである。これによると、極西部と中西部の鍛冶師人口の分布比は、全人口の分布比の 2 倍以上と高く、逆に東部と中央部でのそれは 2 分の 1 にとどまっている。つまり、鍛冶師は、極西部から西部にかけての山地、タライ、内タライに相対的に多く居住していることがみてとれる。とくに、互いに隣接するスルケット、カイラリ、アチャム、ダイレク郡には、要因は明らかではないが、3 万人以上の鍛冶師が分布し鍛冶師の人口が多い上位 4 郡となっている(図 1 参照)。

鍛冶師の人口が多い上位 10 郡の鍛冶師人口の和は 30 万 6,318 人であるが、これは全国の鍛冶師人口の 31.8%を占めるに過ぎず、鍛冶師カーストが全国に広がって分布し、一方でその人口の多少にはある程度の地域差があることを物語っている。

2-2. 仕立師および皮細工師の分布

次に仕立師でかつ楽師でもあるカースト(以下、仕立師)を見てみよう。仕立師は、全人口の 2.0%を占める人口規模をもつ(表 1)。センサスによると、その分布はマナン郡の 39 人を最

表 2 鍛冶師カーストの人口分布

開発地区	上位 10 郡	鍛冶師カースト人口 (1991)	分布比 (%)	全人口	全人口分布比 (%)
東部 (16 郡)		118,489	12.3	4,446,749	24.0
中央部 (19 郡)		151,370	15.7	6,183,955	33.4
西部 (16 郡)		242,140	25.1	3,770,678	20.4
	バグルン	29,301			
	グルミ	26,303			
	カスキ	23,226			
中西部 (15 郡)		266,486	27.7	2,410,414	13.0
	スルケット	42,166			
	ダイレク	32,044			
	ジャジャルコット	24,994			
極西部 (9 郡)		185,170	19.2	1,679,301	9.1
	カイラリ	38,286			
	アチャム	38,002			
	カンチャンプル	26,993			
	バイタディ	25,003			
上位 10 郡小計		306,318 [31.8%]			
合計		963,655	100	18,491,097	100

[] は上位 10 郡小計の分布比。Central Bureau of Statistics (1993)。

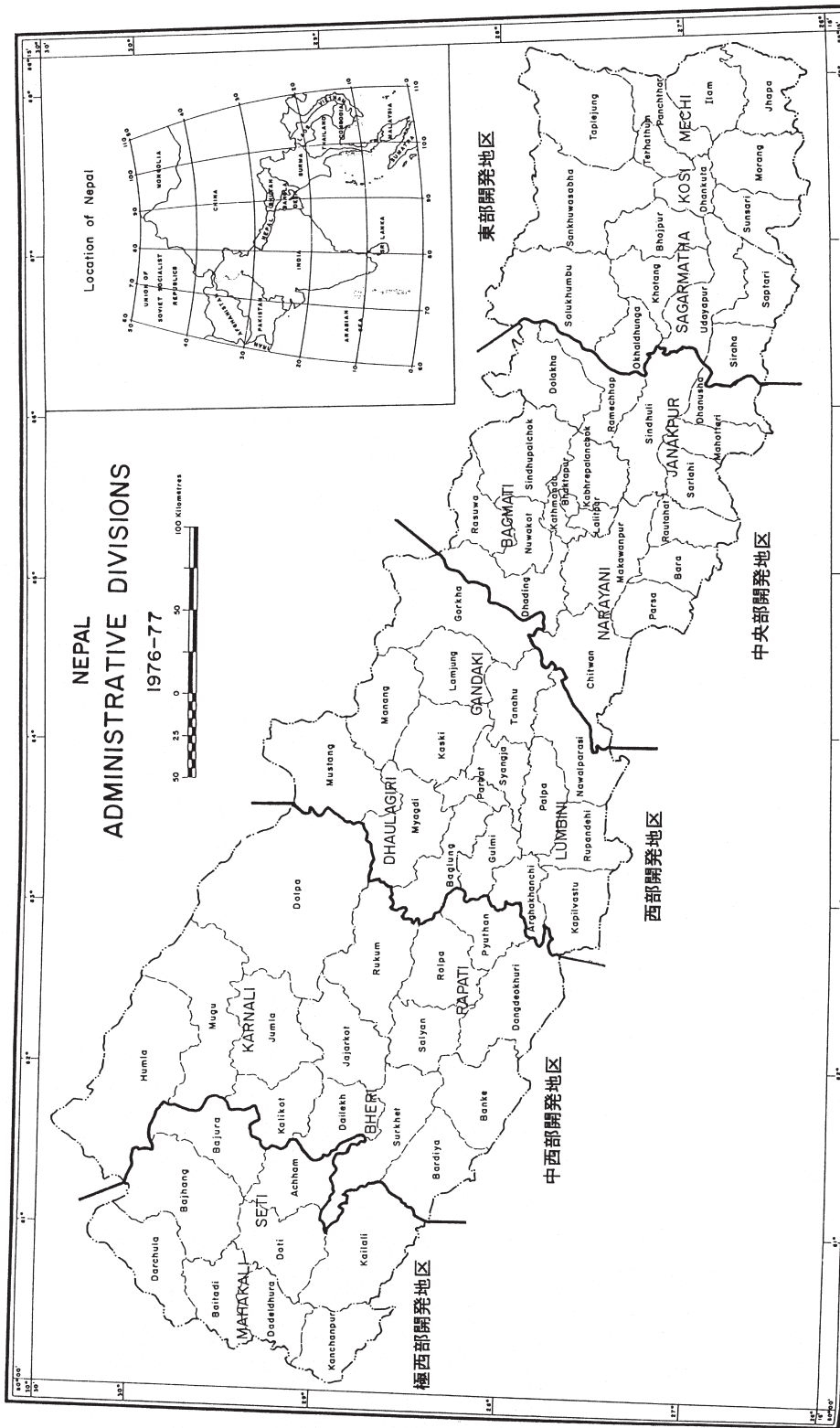


図 1 ネパールの行政区区分

(H.M.G. of Nepal 1980 Nepal Atlas of Economic Development, p. 7 を改変)

小に、アチャム郡の 12,386 人を最大にして全 75 郡に広がる。表 3 は、表 2 と同じ内容で仕立師の場合をあらわしたものである。全人口の分布比より仕立師人口の分布比が高い地区は、極西部、中西部、西部であり、ネパール全体で見ると仕立師も鍛冶師と同じように西部以西により多く分布する傾向をもつ。仕立師が 1 万人以上居住する郡は、人口が多い順にカルナリ川下流域のアチャム、カイラリ、東部のジャパ、西部のカスキ、中西部のスルケットとダンデウクリの 6 郡ある。このことから、極西部の山地から内タライ・タライにかけてと、西部の山地の二つに、とくに仕立師の人口が集中している一帯があることがわかる。仕立師の人口が多い上位 10 郡の仕立師人口が、仕立師全体の人口に占める割合は 28.9%であり、鍛冶師カーストよりは分布の集中度が低いといえる。

次に、皮細工師カースト(以下、皮細工師)の人口分布をみてみる。皮細工師は全人口の 1.5%を占め(表 1)、マナン郡の 4 人を最小にやはり全 75 郡に分布している。表 4 に、皮細工師の分布状況を表 2 に準じてまとめた。全人口の分布比より皮細工師の分布比が高い地区は、仕立師の場合と同じように、極西部、中西部、西部である。ただし、皮細工師の場合、西部にその人口が多い上位 10 郡の内の 8 郡が集中しており、とくに西部の山地に皮細工師の人口が集中した一帯があることが特徴的である。1 万人以上の皮細工師人口を擁する郡はゴルカ、ダディン、バグルン、カスキの 4 郡である。人口分布の集中度の目安となる、上位 10 郡の皮細工師人口が皮細工師全体に占める割合も 34.8%であり、ここまで見てきた 3 つのカーストの中では、もっとも地域的な集中度が高いといえる。

表 3 仕立師カーストの人口分布

開発地区	上位 10 郡	仕立師カースト人口 (1991)	分布比 (%)	全人口分布比 (%)
東部		66,061	18.0	24.0
	ジャパ	11,699		
中央部		62,034	16.9	33.4
西部		102,750	27.9	20.4
	カスキ	11,595		
	タナフ	9,576		
	グルミ	9,197		
	バグルン	9,115		
中西部		77,753	21.1	13.0
	スルケット	10,506		
	ダンデウクリ	10,316		
極西部		59,391	16.1	9.1
	アチャム	12,386		
	カイラリ	12,340		
	ドティ	9,796		
上位 10 郡小計		106,526 [28.9%]		
合計		367,989	100	100

[]は上位 10 郡小計の分布比。Central Bureau of Statistics (1993)。

表 4 皮細工師カーストの人口分布

開発地区	上位 10 郡	皮細工師カースト人口 (1991)	分布比 (%)	全人口分布比 (%)
東部		35,143	12.7	24.0
中央部		58,328	21.1	33.4
西部	ダディン	11,022		
		101,052	36.6	20.4
	ゴルカ	14,281		
	バグルン	10,317		
	カスキ	10,027		
	タナフ	9,946		
	グルミ	9,898		
	シャンジャ	9,019		
	バルバット	7,027		
	バルバ	6,972		
中西部		45,682	16.5	13.0
	ダンデウクリ	7,700		
極西部		36,019	13.0	9.1
上位 10 郡小計		96,209 [34.8%]		
合計		276,224	100	100

[]は上位 10 郡小計の分布比。Central Bureau of Statistics (1993)。

2-3. 西に遍在する職業カースト

以上 3 つのカーストは、山地の職業カーストの中でも人口比が 1.5%以上の代表的な集団である。これらのカーストは、何れも開発地区でいうと西部、中西部、極西部に多く分布する傾向があること、なかでも皮細工師は西部ネパールに集中的に住んでいることがわかった。ここでは、職業カーストが西に偏って分布する要因について若干考えてみたい。

極西ネパールを歩いていて気がつくことの一つは、優勢なカーストであるバフンが他地域に比べてより保守的な生活スタイルを守っていることである。例えば、バフンの中には元々は殺生を避けるため、自ら犁を使って田畑を耕すことをせず農業労働者を雇用している人がいる。そうしたところでは、たいていバフンの集落から少し離れてほぼ同等の人口規模の職業カーストの集落が隣接し、バフン世帯の農耕を雇われた職業カーストが引き受けている。この場合、村の名は一つで、職業カースト集落はバフン村に付随するものとみなされている。つまり、極西ネパールの村には、バフンと農業労働者としての職業カーストとの関係が、あたかも集落間の関係に錯覚するような空間的な配置を示しているところが少なくないのである。一般的にいて、ネパールの西へ行くほど職業カーストを農業労働者として雇う習慣があることは、職業カーストの西に偏った人口分布の一つの要因と考えられる。

また、中央部ネパール以西が 16 世紀から 18 世紀後半にかけて「22 王国」や「24 王国」といった小王国が乱立する舞台であったことも要因の一つにあげられよう。それは、単に 46 の小王国というセンターがこの西ネパール一帯に点在していたことにとどまらない。小王国内に

は、さらに領土を分け与えられた王族がコット (kot) と呼ばれる砦内に屋敷を築き、その領土を支配していた。ネパール政府発行の 50 万分の 1 の地勢図 (Survey Department H.M.G. 1989) を見ると、語尾がコットで終わる地名は、極西部に 15 カ所、中西部に 53 カ所、西部に 38 カ所、中央部に 14 カ所、東部なしと、ネパールの中央部以西に偏在していることがわかる。その数も、地名として残り地図に掲載されているものだけで 120 にものぼることになる。約 300 年という時間幅の中ではあるが、西ネパールには 150 カ所程度の政治・宗教的な中心地が形成されてきたのであり、そこでは支配者によってさまざまな職業カーストがネパール各地から召集されたと考えられる。

王国が成り立つためには最低限の軍備が欠かせない。西ネパールでククリの産地を探したところ、ククリの特産地はバジャンやサリィヤンなどかつての王国の所在地と重なり、ククリは鉋としてではなく武器として生産されてきたことが明らかになった。それは、農具を作る農鍛冶とは性格を異にする刃鍛冶がいたことを示すものであろう (南 1998)。バジャンでは、ククリを作る鍛冶師をはじめとする職業カースト、ネワール商人などはバジャン王によって呼び集められたのだといわれている。これは由緒の正しさを主張する、しばしば耳にするたぐいの伝承であるが、バジャンの場合 1960 年まで王国が続いたこと、12 年くらい前まで鍛冶師カーストによって採掘されていた鉱山跡が残っていること、そこで精錬した鉄から作った農具が現役で使われていることなどから一概に根拠のないものともいえない。

さらに、バジャン郡のタルコットというところには、今日もおバジャン最後の国王の傍系の一族が、尾根の小ピーク上に大きな屋敷をかまえて住んでいる。彼らは従者や農業労働者を雇って、タルコットとタライ平野にある農園を経営してくらす。タルコットの屋敷へと通ずる石畳の階段の脇には、仕立師カーストの密集した集落があり、コットに住む支配者と職業カーストとの間には相互依存的な結びつきがある。

以上、人口比が高い代表的な職業カーストが西に多いことの要因を 2 つあげた。だが、これは全般的な傾向であって、皮細工師が西部に集中することなどにみられる個別の郡に特定のカーストが集中する要因などはさらなる現地調査が必要である。

次に、より少数の職業カーストについても見てみたい。

2-4. 土器職人の分布

研究者によって職業カーストと見るか、特定のカースト職業的な仕事に従事する民族集団と見るかで定説がない集団に土器職人のクマール (Kumār) がある。クマールは、全人口の 0.4% (表 1) と少数だが、センサスによると極西のダルチュラ郡を除く 74 郡に分布していることになっている。

表 5 はクマール人口の多い上位 10 郡を示し、参考としてそれぞれの郡のクムハレ語を母語とする人口を分布比とあわせて示したものである。まず、クマールの人口分布を見てみよう。クマール人口の約 60% は西部の山地に分布し、とくにナワルパラシ郡は 1 万人代と突出してい

表5 クマール (KumaI) とクムハレ (Kumhale) 語母語人口分布

開発地区	上位10郡	クマール人口 (1991)	分布比 (%)	クレハレ語母語人口	分布比 (%)	全人口分布比 (%)
東部		5,249	6.8	123	8.7	24.0
中央部	チトワン	14,844	19.4	169	12.0	33.4
	ダデイン	5,799		94		
		3,150		2		
西部		45,528	59.4	921	65.2	20.4
	ナワルバラシ	10,035		96		
	グルミ	6,326		0		
	ゴルカ	6,242		466		
	タナフ	5,382		0		
	パルパ	5,060		346		
	アルガーカンチー	4,558		0		
	ルバインデヒ	2,587		11		
中西部		10,144	13.2	200	14.2	13.0
	ダンデウクリ	5,246		200		
極西部		870	1.1	0	0	9.1
上位10郡小計		54,385	[71.0%]	1,215 [86.0%]		
合計	76,635		100	1,413	100	100

[]はクマール人口が多い上位10郡小計の分布比。Central Bureau of Statistics (1993)。

ることがわかる。上位 10 郡の全クマール人口が、ネパールの全クマール人口に占める割合も 71%であり、クマールの大半が西部の山地を中心とした郡に集中しているとみられる。

クマール人口がとくに多いナワルパラシ郡では、彼らはカリガンダキ川の河岸段丘上に、ダライ人の集落と隣接して集落をつくっている。ここのクマールは農耕を主としてくらし、一部の人がファグン月(2/3 月)からジェト月(5/6 月)の 4 カ月間に土器づくりもしている。また、濁酒を作るためのつぶ麴マルツァを専門につくりマガールに売っている。彼らは現在ネパール語を母語とするが、3 世代前まで住んでいたパルパ郡では母語であるクマール語を話す人びとも少なくないという。カースト集団と民族集団を区別する基本的な要素は、民族集団の多くは固有の言語を持つか、あるいは過去に持っていたことにあるが、クマールの場合はどうであろう。

センサスには、そもそもクマール語という分類はなく、クムハレ (Kumhale) 語ならばある。言語名としてではないが、同じスペルのクムハレ (Kumhale) という民族名は、私の知る限りビスタ (Bista 1980 (1967): 128) の『ネパールの人々』において言及されている。そこでは「川谷に沿って彼ら(ダヌワール、マジ、ダライ)の近くに住んでいる人びとに、農耕民のバルハムと土器職人のクムハレ (Kumhale) がある。両者の人口は少数で、ダヌワール、マジ、ダライよりモンゴロイド的な容貌をもち、明らかにチベット・ビルマ語系とわかる言語を話す」とあり、クムハレが土器づくりをする、固有の言語をもった民族集団であることが示唆される。

表 5 によると、クマールが多い上位 10 郡(分布比 71%)における、クムハレ語を母語とする人口の分布比は 86%と高い値を示す。このことは、クマールの分布とクムハレ語を母語とする人口の分布がほぼ重なっていることを意味し、クマールとクムハレが同一の集団を指している可能性がきわめて高いことをあらわしているといえよう。

混同を避けるために、クマールと同じように土器を作る北インド系のカースト集団クムハル (Kumhar) についても簡単にみておきたい。表 6 は、クムハルの人口分布をこれまでの表と同じようにあらわしたものである。これによると、クムハルは中央部と西部(のタライ)に人口の 75.4%が集中している。その分布域は、西部の山地に多いクマールとほとんど重なっておらず、両者の人口が共に多く重なっているように見えるナワルパラシ郡とルパンデヒ郡においても、クマールの居住地はカリガンダキ川近くの山地であり、クムハルのそれはタライと内タライであって空間的に分離している。以上のことから、クマールとクムハルは起源を異にする別の集団とみなすことができる。そして、クマールはクマール語ないしはクムハレ語を固有の言語としてもち、カースト職業的な土器づくりに従事する「民族集団」と考えてよいと思われる。

この他にも、ネパールの山地や内タライには、カトマンズ盆地から移住または出稼ぎにきたネワールの土器職人、クマ(プラジャパティ)も見られる。ナワルパラシ郡の内タライにも、ティミ出身のクマが幹線道路沿いのバザールごとに点在して分布する。彼らは、住居の片隅に作業場と窯ををもち、冬季にはティミから縁故の職人を呼び寄せて集中的に土器を作る。山地に住むマガールは、こうしたネワールの土器職人をバーラ (Baṛa) と呼び、同じ山地に住む土器職人クマールをクマールまたはクムバル (Kumbal) と呼んで区別している。また、クマール

表6 クムハル (Kumhar) の人口分布

開発地区	上位 10 郡	クムハル人口 (1991)	分布比 (%)	全人口分布比 (%)
東部		12,303	17.1	24.0
中央部	サブタリ	4,108		
		38,156	53.0	33.4
	ラウタハット	8,438		
	バーラ	7,268		
	サルラヒ	6,469		
	ダヌシャ	5,229		
	マホッタリ	3,530		
	バルサ	3,487		
西部		16,133	22.4	20.4
	カビルバストゥ	5,295		
	ルパンデヒ	4,996		
	ナワルバラシ	2,106		
中西部		3,934	5.5	13.0
極西部		1,482	2.1	9.1
上位 10 郡小計		50,926 [70.7%]		
合計		72,008	100	100

[]は上位 10 郡小計の分布比。Central Bureau of Statistics (1993)。

はネワールの土器職人をクワレ (Kuwale) と呼ぶ。

ここでは、クマールとネワールのクマが製作する土器や製法の違いを詳細に報告する用意はない。だが、一般的にクマールが作る土器は、クマが作る土器よりも厚くて丈夫だといわれ、マガールには好まれてきた。また、クマールの土器にあってクマの土器にない特徴は、表面に何本かの筋が模様としてきざまれていることと、上薬的に使う特定の土のため全体に黒っぽいことである。筋模様は土器の首の部分にまわした紐でヘラを持った手を固定し、土器を廻して表面にヘラで水平線をきざんで作る。

技術的には、見かけは円盤状のロクロ盤に棒をあてて強く回転させ、その回転中に一つの土器を成形する点でよく似ている。だが、クマールのロクロ盤は裏返してみると、中央に窪みがあって、回転の軸となる針状の突起が地面に据えつけられている。これに対して、ネワールのクマのそれは、ロクロ盤の方に針状の突起がついていて、地面の側に穴がうがかれた木を据えている。つまり、ロクロの外見は似ていても、その力学的な構造は全く異なるのである。クマールとクマは、明らかに異なる技術的な伝承をもった集団であることが指摘できる。

2-5. 楽師(バディ、ガンダルバー)の分布

ネパールには仕立師でかつ楽師でもあるダマイとは異なる楽師集団もみられる。その一つバディ (Wadi) は、自家消費のために漁撈をおこない、太鼓や素焼きのパイプを作ると同時に旅をしながら歌を聴かせたり、踊りを見せる芸人でもある (Cox 1992: 51)。人口は、7,082 人でネパール全人口の 0.04% を占める (表 1)。センサスによれば、サブタリ、ソルクンプ、マナンの

3 郡を除く 72 郡に、1 人とか 2 人という郡も多いが分布していることになっている。しかし、表 7 のバディの人口分布から明らかなように、バディの分布はスルケット郡を最高に、中西部のタライ、内タライ、山地に集中(分布比 68%)している。とくに、上位 10 郡のバディ人口が、全バディ人口に占める割合は 75.5%と高く、スルケットを中心とする周辺地域に集まって住んでいることが読みとれる。

一方、一般にガイネ (Gaine) の名で知られ、自称はガンダルバー (Gandharbha) の楽師カーストは、旅をしながらサーランギーという弦楽器を奏で、歌を聞かせる人びとである。その人口は 4,482 人であり、全人口の 0.02%を占める(表 1)。センサスでは、マナン、ドルパ、ジウムラ、ムグ、カリコット、ダルチュラ郡以外の 69 郡に分布しているが、その大部分は表 8 で示されるように、西部と中西部の山地と内タライに集中している。バディと同様にダンデウクリ郡とスルケット郡に比較的人口が多いのは、近年までフロンティアとして開拓の余地があった内タライに位置する両郡への移住が、農地をあまりもたないサービスカーストにとって格好の選択肢であったためと考えられる。ガンダルバーも旅をしていないときには漁撈活動をおこなうが、河川の資源は農地をあまりもたない「貧者にとって最後の公共資源だ」という。

前 3 者の職業カーストが農村に定着してネパールに広く分布するのに対して、土器職人は 3 つの異なる集団がある程度住み分けをしているために、また仕立師兼楽師を除く楽師カーストは出張訪問してサービスを提供するため、人口分布は分散せず特定の地域に集住しているといえる。それでは、これまで概観してきた 5 つの山地ヒンドゥー職業カースト、すなわち鍛冶師、仕立師、皮細工師、バディ、ガンダルバーは互いにどのような関係があるのだろうか。

表 7 楽師カースト (Wadi) の人口分布

開発地区	上位 10 郡	楽師 (Wadi) 人口 (1991)	分布比 (%)	全人口分布比 (%)
東部		191	2.7	24.0
中央部		423	6.0	33.4
西部		532	7.5	20.4
中西部		4,814	68.0	13.0
	スルケット	1,025		
	バルディヤ	676		
	ダンデウクリ	666		
	ジャジャルコット	587		
	バンケ	472		
	ルクム	455		
	サリイヤン	415		
	ダイレク	321		
極西部		1,122	15.8	9.1
	カイラリ	545		
	カンチャンブル	187		
上位 10 郡小計		5,349 [75.5%]		
合計		7,082	100	100

[]は上位 10 郡小計の分布比。Central Bureau of Statistics (1993)。

表 8 楽師カースト (Gandharbha) の人口分布

開発地区	上位 10 郡	ガンダルバー人口 (1991)	分布比 (%)	全人口分布比 (%)
東部		289	6.4	24.0
	ジャバ	157		
中央部		576	12.8	33.4
	チトワン	295		
西部		1,957	43.6	20.4
	カスキ	376		
	グルミ	245		
	タナフ	209		
	バルバ	171		
	アルガーカンチー	155		
中西部		1,540	34.3	13.0
	ダンデウクリ	496		
	ビュータン	275		
	スルケット	230		
極西部		122	2.7	9.1
上位 10 郡小計		2,609 [58.2%]		
合計		4,484	100	100

[]は上位 10 郡小計の分布比。Central Bureau of Statistics (1993)。

これを推測する上で興味深いことに、とくに西ネパールの楽師(ガンダルバー)と鍛冶師、仕立師の間で共通した隠語を話すことがある。詳細は別稿に譲るが、これはパルシー・バサ(パルシー語)ないしはパルシー・コッサル(コッサルは口を意味するので「パルシー口調」)、トクネ・コッサル(騙し口調)と呼ばれ顧客を欺くとき、秘密の情報交換などに有効である²⁾。コックス (Cox 1992: 55, 64–65) はバディの隠語を家業の一つである売春の相談に欠かせないものとして、いくつかの言葉をリストにしているが、これを見るとネパール語を変形させる法則は鍛冶師のそれとよく似ている。個々ばらばらのように見える職業カーストも、過去には共通の隠語をもつ一つの大きな文化共同体に属していたとも考えられる。しかし、金銀細工師など比較的上位のカーストは最下位の楽師と隠語が共通することで系譜が近いと思われることを警戒し、また隠語が隠語でなくなることを恐れて、カースト外の人前で隠語については語らないことが暗黙の約束になっている。つまり、現在は職業カースト間に階層が認められる。

3. 山地ネワール職業カースト

3-1. 移住と山地ネワール

ネパール山地の職業カーストの分布を考えるにあたり、非常に重要な位置を占めるのが、土器職人のところで少しふれたネワールの職業カーストの問題である。ネワール社会は、山地ヒンドゥー教徒がネパールに流入してくる以前から独自のカースト体系をもち、ゴルカ王朝によるネパール統一後は彼らが体系づけたカースト序列にネワールのカーストが組み入れられた。しかも、ネワールカーストの細分化の程度は山地ヒンドゥーのカースト体系に比べてきわめて

高く、モノを作る職業カーストの場合ほぼ素材ごとに異なるカーストに分かれているほどである。とくに、チベット仏教やネワール仏教の仏像と儀礼用具、ヒンドゥー教の神像や祭具など、日用品もさることながら宗教に関連した物作りが特徴といえる。

一般に、ネワールの職業カーストの技術レベルは山地ヒンドゥーの同じ職種のカーストがもつ技術レベルよりも高いといわれており、そこには前者による後者の仕事領域の浸食、後者による前者の技術の模倣などが歴史的にみても進んできた。とくに、ネワールは後述するさまざまな理由から、カトマンズ盆地を離れて山地の尾根上に存在する南北を結ぶ交易の要衝地に移住し定着してきた。こうした山地ネワールが住む町は、石畳がひかれた大通りの両側に商店などが軒をつらね、「リトル・アッサン(カトマンズの通り)」とでも呼べるようなバザールができていて共通する。ネワールは本質的に都市生活者であり、その有形無形の影響は山地ネワールを通じてネパール各地に広がったと考えられる。

センサスでは、ネワールを一つの民族集団として一括して取り上げているため、残念ながら個々のネワール職業カーストの人口分布は明らかでない。しかも、山地のネワール・バザールではカプラン (Caplan 1975: 25) が指摘するように、大半のネワールは明らかに低カースト出身とわかる人も含めて、自らをシュレスタと名乗るようになってきた。そのため、サキャなど上位の職業カーストを除いて、カーストの細目は今後ますますわからなくなるであろう。ネワール全体の開発地区別の人口分布を表9に示す。ネワールは、故地であるカトマンズ盆地内の3つの郡に人口のほぼ半分(47%)が分布し、それを含む中央部に71%が分布する。言い換えると、カトマンズから遠く離れたところに移住した人口は29%にとどまり、ことに中西部(2%)、極西部(1%)はネワール人口が今もって少ないといえる。

このように山地ネワールのカースト構成は「シュレスタ化」により不明なことが多いが、移住の時期とその理由はいくつかの民族誌で報告されている。例えば、田村真知子によると東部ネパール、サンクワサバ郡チャインプルでは、18世紀後半頃からパタンのネワール・シュレスタの移住がはじまり、鋳物カーストは7世代前(7にはたくさんのという意味もある)に移住した。後者の移住の理由はカトマンズ盆地での天然痘の流行で罹患者が追放されたためだと

表9 ネワールの人口分布

開発地区	ネワール人口 (1991)	分布比 (%)	全人口分布比 (%)
東部	149,788	14	24.0
中央部	740,863	71	33.4
[カトマンズ盆地内3郡]	485,364	47	5.9]
西部	126,455	12	20.4
中西部	17,787	2	13.0
極西部	6,197	1	9.1
合計	1,041,090	100	100

カトマンズ盆地内3郡(カトマンズ、ラリトプル、バクタプル)の数値は中央部の内数。Central Bureau of Statistics (1993)。

いう伝承がある(田村真知子 1995: 2)。

イルティスが報告する西部ネパール、タナフ郡バンディプルでは、19 世紀初頭にバクタプルの商人カーストが移住してきた。記録によれば、最初の移住者は、少なくとも 7 世代前(1775–1800 年)までさかのぼる。移住の主な理由は、カトマンズ盆地の人口圧の上昇を背景に、南北交易の要衝の地で交易によって生計を立てるためであった(Itis 1980: 103,108)。同じバンディプルについて別の研究者は(Seddon et.al. 1979: 179)、1830 年頃には小さなネワール共同体ができあがったとし、それが地元の綿を使った小規模な織物生産を先導したという。

一方、中西部ネパール、ダイレク郡ベラスプル(仮名)では 3 世代以上前から 1 世代前までの間に、カトマンズのネワールが段階的に移住した。その多くは、郡行政に関わる上級公務員として転勤してきた人が、ベラスプルで結婚し商業などをはじめて定着したものである。ここにはネワールの職業カーストも多い(Caplan 1975: 24–26)。また、極西ネパール、ドティ郡シルガリドティも山地ネワールの多い町だが、ここでは 100 年前の 1885 年頃バクタプルより移住してきたという伝承が残っている。

一般に、カトマンズのネワールによる地方への移住は、ネパールを統一したゴルカ王朝による圧政や高い税から逃れることを目的に、19 世紀はじめに開始したといわれる(Seddon et. al. 1979: 179)。だが、上記の事例から移住の時期には時間差があり、中央部から東部にかけてへの移住で 200 年、中西部以西への移住で 100 年くらい前にさかのぼると考えられる。

3-2. 特産地の形成

ネワールは移住先でもそれまでカトマンズで培ってきた商人や職人としての才覚を発揮し、商売や交易業、職人的な仕事に従事して経済的に成功をおさめてきた。それは、今日でもネパールの人がことわざか決まり文句のようにして言う、手工業ないしは家内工業製品の特産地を見てみれば明らかになる。

田村真知子(1995: 17)によると、ネパールの「4 大名産」といわれる物は、サンクワサバ郡チャインプルのアンコラー(鋳物の水差し)、ボジプルのククリ(鉋、武器)、バクタプル郡サノティミのマトテキ(素焼きの壺)、バクタプルのダヒ(ヨーグルト)であるという。また、セドンほかは、ボカラの銅細工、タンセンの金属加工、バグルンの紙も 19 世紀末までには全国的に有名になったという(Seddon et.al. 1979: 179)。他にも、バルバ(タンセン)のカルワ(鋳物の注ぎ口付きの水差し)とダカ(帽子やショールの生地)、ククリではスンサリ郡ダラーン、ダンクッタ、オカルドウンガ郡アンコーラ、バジャン郡チャインプル、サリィヤンなどが全国的に名を馳せた特産地といえるであろう。

この内、山地ネワールの職業カーストにより作られている物は、順にアンコラー、銅細工、金属加工、カルワであり、マトテキとダヒはカトマンズ盆地内のネワール職人と農民の手による。ダカと製紙については不明だが、織機や紙漉き具をネワールが用意した可能性はあろう。つまり、ククリを除く大半の特産品が山地ネワールのバザールで作られたり、取引されたり

している。興味深いのは、特産品として有名になっている物が、金属器や織物などどれをとっても日用品ばかりであることだ。山地ネワール・バザールは、神像や仏像などの特別の物ではなく、日用品を作るような職業カーストの人で、ある程度の人口規模をもっているカーストが移住してきたと考えられる。

以上のことから、ネパールの手工業の特産地化、言い換えると全国的なマーケットの展開は、おもに山地ネワールによって形成されてきたということができ、逆にネワール・バザールの特産品により、私たちはそこにネワールのどの職業カーストが移住して住んでいるかをある程度推測できることになる。

3-3. ネワール職人の店長(サフ)化

[パタンのタムラカールの事例]

パタン王宮から南ヘラガンケルに向かう大通りの両側は、銅や真鍮などの金属製品を売る店が集中している。通りから東西へのびる小径に入ると、銅製品を作る家内生産の作業場が多数見られ、水入れ、鍋、楽器などが作られている。

この通りで、偶然金属製の手押し車に割れたり古くなった大量のピットル(黄銅)とカーンス(青銅)製品の古物を運んでいる人に出くわし、後をついていった³⁾。着いたところは、Cottage Craft という銅合金の鋳物と銅の鍛造品を扱う卸商であった。経営者は30歳代のネワールでタムラカール・カースト(銅鍛冶師)の人で3代目である。祖父がまだ若い内は自ら銅製品を作りましたが、既に祖父の代にはいくつかの工場をもち、卸し専門の店主(saḥu)になっていたという。店の商売相手はヨーロッパを主として国際的な広がりがあり、私が彼とはじめて会った1996年の3月にも、彼は大阪で開かれる国際見本市への出店のために奔走中で、次には錫の買い付けにシンガポールへ行くスケジュールも控えている多忙ぶりであった。

彼はパタンのラガンケルにある工業団地(Patan Industrial Estate)内に、銅ないしは黄銅製の水入れ(gaḡri)をプレス機で作る工場をもつ他、各種の鋳物工場、プレス機で作った青銅の原型を鍛造で成形して皿(taḷ)にする工場、みやげ物の装飾品を作る工場など5-6軒を所有する。工場で働くのはおもに山地ヒンドゥーの鍛冶師カーストであり、中には北インド系のヒンドゥー鍛冶師も雇われていた。

先ほどの古物というのは、行商人がネパール各地から回収してきたものであり、パタン市内にある古い銅合金を溶解して再びインゴットにする工場へ持ち込むためのものであった。この店では、8~10人のシンドゥパルチョーク郡とカブレパランチョーク郡に住むなじみのタマン人とカトリ・カースト農民を行商人(duluwa)として雇用している。彼らは、年に2回チャイト月(3/4月)とカーティック月(10/11月)に店を訪れ、掛け売り(udhaṛo)されていた新品製品と回収した古物の精算をし、農閑期に再び行商に行くため背負いかごいっぱいの新品をもって帰郷する。それは価格にして2万~2万5千ルピー分の各種金属器になる。行商の多忙期は結婚のシーズンと重なるマンシール月(11/12月)からバイサーク月(4/5月)である。

山地帯では、大きめの背負いかごいっぱいに各種の金属器を入れ、計り売りしながら村々をまわる行商人をときどき見かける。行商人の中にはポーターを雇って背負いかごをもたせ、自らは商談まともに専念する人もいる。古物でもまだ使えそうなものや珍しいものは、カトマンズにある外国人向けの骨董品店に持ち込めば、銅製品の店長に買い取ってもらう場合ではあり得ないような高値がつく。都市や町に住むことを常としてきたネワールは、行商という販売方法によって金属器のマーケットを確立し、再加工の原料をも入手してきたのである。

ネワールの職人が商売で成功をおさめると、店主さらにはここで見たような企業家が変わっていくことは、カトマンズという地の利による面もあるとはいえ、山地ネワールにもあてはまる。田村真知子が詳細に論じる(田村真知子 1995: 11, 16)ように、東部ネパール、サングワサバ郡チャインプルというネワール・バザールでも銅合金の鋳造をするタカルミ・カースト(サキヤ姓)は、この10年で店長から独立することによって、請け負いではなく独自に材料を仕入れ、販路を開拓できるようになった。製品の販売は、地元向けには街の店舗ないしは定期市と行商を通じておこない、カトマンズ向けには仲買や卸商を通していった。さらに、1986年にはカトマンズの王宮通りに「チャインプル・プラス」という直販店を開く職人も現れている。

[バンディプル、ダマウリの事例]

次に、西部ネパール、タナフ郡の斜陽化したネワール・バザール、バンディプルについてみてみよう。ここで調査をおこなったイルティスによると、バンディプルは元々マガルが先住し、小王国はあったが農村の域をでない性格であった。19世紀初頭、ここにバクタプルよりネワールが移住してからは、商業が栄え南北交易の中継地となった。1950年代になると、南の内タライでマラリアが鎮圧され移住者が増えると同時に、新たにナラヤングートという都市が生まれる。これに対応して、バンディプルのネワールはナラヤングートに分家を出し、ますます交易のネットワークを強化した。つまり、内タライの開拓はバンディプルの衰退に直接的な打撃を与えることはなかった。

問題は郡庁の移動であった。1968年、抵抗もかなわず、郡庁がバンディプルからダマウリへ移り、ダマウリを通過するカトマンズーポカラ間の道路建設の話が具体化する。結局、1973年にはその道路が開通して、彼らは道路沿いのダマウリやビマルナガル(おそらく現在のカイレニ)に店を移して対処する。その後、バンディプルの人口は減ってバザールは衰退し、今ではかろうじて教育の町として名をとどめる状態になった(以上は Iltis 1980 からまとめた)。

さて、それでは遷都してできた新しい町ダマウリで、ネワールはどのような商売をしているのか、銅器を中心に追ってみよう。ダマウリのバザールには、1996年現在、おもに金属製品を扱う金物屋が5軒ある。この内、1軒はタクル・カーストが、他4軒はネワールが経営する。また、5軒の内4軒は1984年頃から自前の鍛冶場をもち、専ら主要商品である銅の水入れと大鍋コシー(kosi: 蒸留酒を作るとき濁酒を沸騰させる鍋)を生産している。見学したネワールの金物屋に付属する鍛冶場では、ゴルカ郡とバルバ郡から出稼ぎにきた山地ヒンドゥーの鍛

冶師カースト 2 人が、重さによる出来高払いで水入れとコシーを作っていた。1 人は単身で、もう 1 人は家族と一緒にきており、銅器の他には鉄鍛冶ができるという。

水入れは、近隣の山地ヒンドゥーが好む「ブッタ・ハネコ(模様を刻んだ)」と呼ばれるものであり、これが店の稼ぎの大半を占める。1996 年の 1～3 月の間で水入れは約 200 個、総額 10 万ルピー分が売れた。小売価格は 260Rs./kg で、卸値は 255Rs./kg、あまりあることではないが新品の引き取りだと 245–250Rs./kg で買う。材料の銅板は、ネパールガンジから仕入れており、仕入値は 217–219Rs./kg だそう。ダマウリからだとパタンの方が距離的に近く、しかも銅板の値も安い(205Rs./kg)が、経営者はパタンの銅板は厚すぎてよくないという。

ダマウリの事例は、パタンと同様に、ネワールの職人が店主になって山地ヒンドゥーの鍛冶師カーストを雇用するという形を示す。ただし、ダマウリで製作するのはあくまで地元の需要を見据えたブッタ・ハネコ・タイプの水入れであり、それは次に見るネワールが好む「サーダ(装飾のない、無地の)・タイプ」の水入れを作る B 村や先述したパタンと根本的に異なる点である。

4. 山地ヒンドゥー鍛冶師カーストの対応

4-1. ダディン郡ベニガート行政村 B 村の事例

B 村は 1996 年 3 月現在、33 世帯、3 つの父系集団(タール)の鍛冶師カーストからなる。おもに鉄鍛冶で使う鍛冶小屋(アラン)は村はずれに 2 つあり、銅製品加工はそれぞれの家の物置内に設けられた小規模な鍛冶場を使う。金銀細工は国道沿いの店内に作業場がある。33 世帯中、主に銅と黄銅(ピットル)製品を作るのが 8～9 世帯、金銀細工をするのが 6 世帯、鉄鍛冶をするのが 4 世帯で、計 18～19 世帯(全体比約 55%)が金属加工業に従事している。なお、現在 6 人の青年が、カトマンズ盆地内のタンコットに出稼ぎにいており、ネワールの店主(サフ)からの請け負いで銅の水入れをつくっている。また、33 世帯中、バフンから定期的な報酬を受け取り金属製品の修理をする継続的な関係、すなわちピスタ(顧客)–カミ(家の鍛冶師)関係を結んでいるのは 6 人である。

実は B 村は、1977 年から 1979 年にかけて石井により調査がおこなわれ、詳細な報告(Ishii 1982: 74, 石井 1987, 石井 1992 など)がなされているところである⁴⁾。私たちの調査は 3 日間という短期で、とても十分に比較できる資料を持ち合わせていないが、17 年間の大きな変化にだけ注目してみたい。まず、世帯数が 22 世帯(石井 1987: 171)から 33 世帯に増加した。また、「技能のある人は、銅、真鍮などの器の修理も行う」が、「特に真鍮製品(壺、皿等)は B 村では作られない」(石井 1987: 173)状況が、銅器の製造で活気を呈する村へと変化した。

銅器作りのリーダー的な存在である B 氏は、1976 年 15 歳のときパタンに 1 年間住んで、ネワールの銅鍛冶カースト、タムラカールのところで働き、鉄鍛冶に加えて多少銅器作りも覚えた。1988 年頃、再びパタンのラガンケルに出稼ぎにいき、タムラカールの店主(サフ)のもとで銅器作りをした。店長は材料の銅板をくれ、水入れが完成すると 1kg につき 25 ルピーの手

間賃をくれたという。標準的な大きさの水入れを2個作ると4kgになり100ルピーの稼ぎになった。多いときは、B村から彼のような出稼ぎ者が15~20人いたそうだが、1991年パタンでの生活費が高いことや、そろそろ故郷に帰りたくなったことから帰村し、B村で銅器を作りパタンに出荷する生活にかえた。先に述べたタンコットの6人は、まだ若いので向こうでの生活が苦になっていないらしい。

今でも、材料の銅板はパタンから求め(205Rs./kg)、できた水入れはパタンのネワールの店主に270Rs./kgで卸す。水入れは、水漏れ止めに中に松ヤニを流し込んで被膜にしており、この重さも加わるので純銅の製品(300Rs./kg)よりも少し単価が安い。バス賃を払い4~5時間かけてパタンへ出荷する方が、出稼ぎより楽で得なのだという。ここでは、ネワールが好む銅製のサーダ・タイプの水入れを鍛造するが、いくつかの作業グループに分かれて流れ作業をおこなう。簡単な作業グループは、子供たちだけで編成されている。専用の工具も、ネワールのものを真似て作られている。

サーダ・タイプの水入れの胴部分は、上下2つの桶状のパーツを接合して茶筒状の形とする。パタンでは、先のCottage Craftの工場がそうであったように、このパーツはプレス機械で型押しされて大量生産されている。その場合、プレス機によりできる独特のしわを、槌で叩いてつぶした跡が胴の中央部に残り、見る人が見ればそれとわかる。しかし、消費者で半機械製か手製かを気にとめる人は多くなく、それは製品の価格にも反映している。手製の大型銅器コシー(kosi: 蒸留酒を作るとき濁酒を沸騰させる鍋)、ギャンポー(gyampo: 蓋つきの穀物貯蔵器、ネワールの結婚贈答に不可欠)、カドゥカウロ(khadukaulo: 両手つきの大鍋、山地ヒンドゥーの花婿はこれで足を洗う)が300Rs./kgで、手製のブッタ・ハネコ・タイプの水入れが280Rs./kgで売られているのに対し、半機械製のサーダ・タイプの水入れは270Rs./kgで売られていて大差がないのである。B村製のように、銅円板から叩き出しで作る完全な手作りの水入れはパタンのバザールではほとんど売られていなく、先述したように卸値は270Rs./kgだが小売価格は確認できていない。

4-2. 山地ヒンドゥー銅鍛冶カースト

さて、B村の事例は、ネワールのタムラカールが職人から店長ないしは企業家へと昇格していくのに伴い、数の減った職人が山地ヒンドゥーの鉄鍛冶カーストにより穴埋めされていることを教えてくれる。

ホッファーは、中央部ネパールのタマン人地域での調査に基づき「カミにとって銅は間違いなく新しい素材である」(Höfer 1976: 363)と主張し、以下のように述べる。すなわち「カミは銅を扱うようになってまだ数十年しかたっていない、技術に精通した者は少数である。実際、水入れ(gagri)づくりを観察させてもらった鍛冶師は、その技術を義父から学んだという。義父はというと、カトマンズ盆地にほんの少し滞在したとき、ネワールの銅鍛冶を単に見ただけで、その後見よう見まねで水入れをつくりあげた。そのため、カミの技術的なスキルは充分と

はいえず、カミがつくった水入れは、ネワールのそれよりも作りが素朴である。しかし、たとえそうした製品でも、信条として細かな注文をつけないタマンという謙虚な消費者とうまく合致しているのである」(Höfer 1976: 373–375)という。銅は山地ヒンドゥーの鉄鍛冶師には新しい素材で、ネワールの模倣により生産されるようになったというホッファーの指摘は、B村においてはあてはまるといえる。

山地ヒンドゥーの鍛冶師(ヴィシュワカルマ)の中で、銅製品をつくることのできる職人は必ずしも多くない。ナワルパラシ郡のマガール地域では、鍛冶師は水入れなどの銅器の多少の修理はできても、製品を一から作ることはできず、パルバ郡で聞かれるタモタ(銅鍛冶師)というカースト名も使われない。マガールにとって銅製の水入れは、結婚式における贈り物として欠かすことができないものであるが、地元で入手できるものではなく内タライのナラヤングートという町まで買いに行く耐久消費財なのである。

仕立師兼楽師のみが使うので、水入れや大型銅器よりはるかに需要が少ないと思われる銅製のトランペットや太鼓の胴(ケトル・ドラム)を作るのも銅鍛冶師である。これに関して、ティンゲイは「ボカラの北西地域で地元の鍛冶師によりつくられる銅製で長く真っ直ぐなトランペット、カルナルは、カトマンズの銅鍛冶師によってつくられるナルシンガとは違って、銅が十分に叩き込まれていないので出来上がった楽器はとても重い」(Tingey 1994: 63)と述べる。また、ナルシンガという三日月形のホルンは、東部、中央部、西部でそれぞれ形が異なるといい、次のように書いている。中央部のナルシンガは長く細いタイプであり、カトマンズ盆地のそれは短く太いタイプ、極西部では最も小型で弧がゆるいタイプである。東部と中央部タイプは、カトマンズのアッサンやパタンのネワール銅鍛冶師がつくり、前者はチャインプルなど山地ネワール・バザールのネワール銅鍛冶師によってもつくられる。西部タイプのナルシンガは、カミにより地元でつくられるが、それはネワールの銅鍛冶師が作るものより出来ばえが劣る傾向がある(Tingey 1994: 57–60)。

これから、銅製の楽器についても、これまで見てきたように山地ヒンドゥー銅鍛冶師とネワール銅鍛冶師の両方により作られていること、前者の技術的なレベルは後者よりも多少低いことがわかる。

5. 考察

5-1. 銅製水入れの形状分類

ナルシンガに地域によるタイプ別が見出されるように、銅製の壺型の水入れ(gaṅri)も地域や使用者の違いにより、少なくとも3つの異なる形状タイプに分けられる。まず一つは、パタンやB村で作られているサーダ(saḍa: 装飾のない、無地の)と呼ばれるタイプである。「サーダ・タイプ」は、胴の真ん中で上下のパーツを接合していること、そして接合部分が多少くびれている特徴がある。これは、専らネワールの人びとに好まれ、カトマンズでも赤ん坊を腰に掛けて抱きかかえるのと同じスタイルで、この水入れを運ぶ光景をよく目にする。材料として

は、黄銅製が多く銅製のものもある。B村のように銅円板から鍛造する手作りのものと、パタンの工業団地のようにプレス機で型押しする半機械製とがある。最近では、これと全く同じ形のアルミニウムやプラスチックでできた工業製品も市中に出回っている。

もう一つは、ダマウリで作られているブッタ・ハネコ (butta haneko: 模様を刻んだ) と呼ばれるタイプである(以下「ブッタ・タイプ」と呼ぶ)⁹⁾。「ブッタ・タイプ」は、やや背の高い典型的な壺型をしており、底面の径が小さく口の部分の径くらいしかない。肩のところの周縁と口の上の周縁に、名前の由来の細かい模様が刻まれている(写真2)。このタイプは、山地ヒンドゥーの諸カーストやマガールなど山地の諸民族に好まれる。実際、私が調査しているマガールの村にはブッタ・タイプの水入れ以外の一つも存在しなく、その嗜好の違いは明白である。材料は銅製のみであり、全て手作りである。

最後は、ネパールの極西部で見られる水入れであるが、そこではこのタイプしか無いので弁別的な名はなく単にガーグリと呼ばれる。そこで、仮に「極西タイプ」と呼んでおこう。この特徴はブッタ・タイプの水入れとは逆に、底面の径を最も大きくしていることにある。見るからに安定したずんぐりとした形であり、口のところに太い輪の取っ手が1つつけられていることも他にない特徴である(写真1)。

先に述べたようにカトマンズ盆地のネワールは水入れを腰にのせて運ぶため、サーダ・タイ

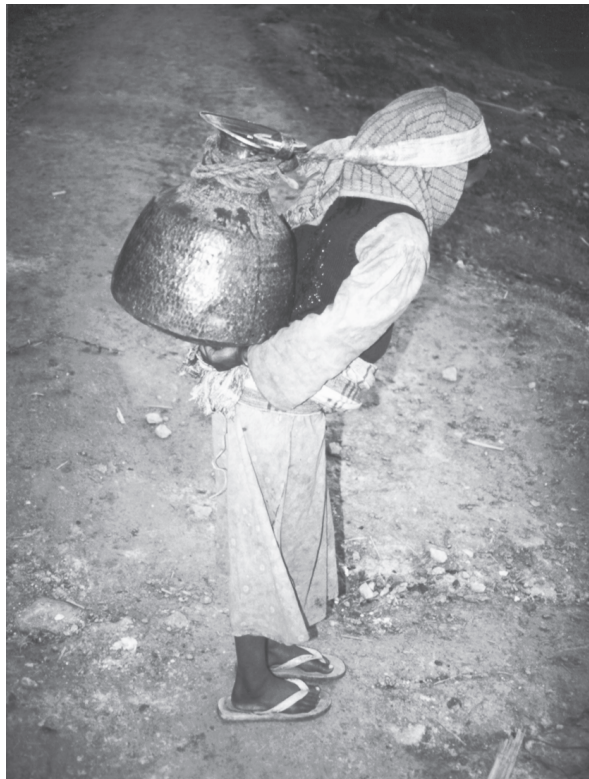


写真1 極西タイプの水入れ(極西ネパールのバジャンで撮影)

ブの水入れは底面に角があり、手がまわるようにスリムにできている。一方、ブッタ・タイプの水入れの使用者は、山地に住むため水入れを背負いかゴに入れて運ぶことが多い。底面が小さいこのタイプの水入れは、けっして床において安定した形ではないが、逆四角錐の背負いかゴに入れたときにピッタリと収まるようにできている。極西ネパールでも、山地では水汲みに背負いかゴを使うことが多い。この背負いかゴは、開口部分は円だが底面は開口部分とほぼ同じ径の四角であり、四隅に足がついたずんぐりとした形をしていて独特である。そして、この形は底面が大きい極西タイプの水入れを入れるのにフィットしている。

つまり、水入れの形状は、使用者の水入れの持ち方と関連して出来上がってきたと考えられる。それぞれの背負いかゴと水入れ、あるいは腰で持つ方法とサーダ・タイプの水入れという組み合わせは、セットで成り立っているのである。先に、水入れの選択を好みと表現したが、それは使い勝手に基づく経験的な選択であり、他のタイプを選択する余地などないと考えたほうがよさそうである。

ところで、極西を除く山地ネパールで一般的な逆四角錐の背負いかゴの長所は背負い易さにあり、そのためには置くときの少々の不便さは我慢しなければならない。つまり、何かに立てかけたり、バランスをとるために底に小石をはさんだりしない限りかゴは立たない。一方、極西タイプのかゴは大きな底面と足のおかげで支えなしに立つ利点をもつ。だが、それを優先したために、構造上背負ったときにどうしても後ろに引っ張られて背負い易さは二の次となっている。カトマンズ盆地のネワールはともかく、山地環境に住む人々にとっての技術的な適応を考えた場合、背負い易さを優先した逆四角錐のかゴが最も合理的であり、これにちょうど収まるブッタ・タイプの水入れが山地ネパールで発展してきた水入れの典型であると考えられる。

先に、銅という素材は、山地の職業カーストの鍛冶師になじみが薄かった、あるいは銅器づくりはネワールの銅鍛冶師を模倣する形で最近になってはじまったという指摘を紹介した。しかし、ネワールの銅鍛冶師が作る水入れは、現在とはともかく従来はサーダ・タイプのもののばかりであったと考えられ、山地のヒンドゥー鍛冶師の中に銅鍛冶師がいなければ、ブッタ・タイプの水入れの作り手はネパールの山地に存在しなかったことになるのである。

5-2. 銅製水入れの製法分類

ここで注目したいのは、先に書いたダマウリの金物屋の経営者が言った「パタンの銅板は厚すぎてよくない」という話である。これは、ダマウリで作られているブッタ・タイプの水入れに適した銅板と、パタンのネワールやB村の鍛冶師が作るサーダ・タイプの水入れに適した銅板とでは、厚さが異なるということを示唆している。

とくに強調すべきは、ダマウリにおける水入れの作り方の違いである。ダマウリの山地ヒンドゥー鍛冶師によって作られる水入れの胴部分は、四角い銅板を丸めて接合した円筒状のパーツを、円板から叩き出した皿状の底に接合したものである(写真2)。つまり、ここではサーダ・タイプの水入れでは欠かせない、鍛造によって円板から深鉢を作る工程がない。その



写真 2 プッタ・タイプで「接合型」の水入れ(タナフ郡ダマウリの鍛冶場)

ため、銅板が必要以上に厚い必要がないのである。胴に縦の継ぎ目ができる、このタイプの製法をここでは「接合型」と名づけておこう⁶⁾。

実は、プッタ・タイプの水入れには2つの製法がある。一つは「接合型」であり、もう一つはホッファー (Höfer 1976: 374) が図解したような、鍛造によって作った3つのパーツ、すなわち深鉢の胴と首と口の部分をつなげるタイプである。これは、鍛造により円板から高さ20cmほどの深鉢を作る工程が特徴なので「鍛造型」と名づけた。鍛造型はホッファーが述べるように、山地ヒンドゥー鍛冶師がネワールの銅鍛冶カーストから習得した製法であり、本来サーダ・タイプの水入れで生まれた製法がプッタ・タイプの水入れを作るときにも応用されたものと考えられる。

こうして見ると、極西タイプの水入れにも縦に銅板を接合した継ぎ目があり、接合型の製法がとられていることがわかる。つまり、水入れを形状と製法によって分類すると表10のように5つに整理することができる。サーダ・タイプの水入れは「鍛造型」で半機械製と手製があ

表 10 水入れ (gagri) の分類

形状タイプ	製法型[手段]	材料	製作者	事例
サーダ・タイプ	鍛造型[プレス機] [手]	黄銅(銅) 銅	ネワール銅鍛冶師(タムラカール) タムラカール、タムラカールから 学んだヒンドゥー鍛冶師	パタン工業団地 パタン、B 村
プッタ・タイプ	鍛造型[手]	銅	タムラカールから学んだ ヒンドゥー鍛冶師	Höfer (1976)
	接合型[手]	銅	ヒンドゥー鍛冶師	ダマウリ
極西タイプ	接合型[手]	銅	ヒンドゥー銅鍛冶師(タマタ)	バジャン郡

り、ブッタ・タイプの水入れは「鍛造型」と「接合型」の両方の製法が見られる。極西タイプの水入れは「接合型」である。この内、ブッタ・タイプの「接合型」の水入れが、本来山地ヒンドゥーの鍛冶師がつちかってきた製法といえるであろう。ダマウリの経営者が、わざわざネパールガンジまで原料を買い求めに行ったのは、ネパールガンジが位置する中西部ネパールはネワール人口が少ないので、「鍛造型」に適した厚い銅板が一般的でなく、むしろ「接合型」に適した薄い銅板が入手しやすいからであったと推察される。

6. まとめ

本稿では前半で職業カーストの分布を整理し、後半では銅製品に注目してネワールと山地ヒンドゥーそれぞれの銅鍛冶師による銅製法の展開を記述した。まず、職業カーストのなかでも代表的な鍛冶師、仕立師兼楽師、皮細工師は、ネパールに一樣に分布するのではなく、西部以西により多く分布することがわかった。その要因は、ネパール西部以西では優勢するカーストに農業労働者として雇用される職業カーストが少なくないこと、歴史的に小王国が多数あった西ネパールでは、単なる農村以上に職業カーストのさまざまな技術やサービスが必要とされ、ネパール各地から職業カーストが呼び集められたことなどによるものと考えられる。また、山地ネワール・バザールの形成が、西では東より遅かったため、同業種のネワール職人による仕事領域の浸食が進んでいないという面も銅鍛冶師の場合などにはあてはまる。

一方、こうしたセンサスを使った分布では見落としになってしまう側面が、山地ネワール・バザールの存在とネワールの職人であることも指摘した。例えば、土器職人のクマール人とネワールの土器職人クマとの間では技術的な伝承が異なり、できあがった製品も異なる。本稿では十分に立ち入れなかったが、それは消費者であるマガールにどのような評価や買い分けをもたらしているのか、あるいは両者はどのように影響を及ぼしあっているのかをも考察しなければならない。

後半ではこうした知見を受けて、ネワール職人と山地ヒンドゥー職人との関係を見るため、その一つの事例として銅鍛冶師の技術的な違いと銅器作りの展開をみた。銅製水入れの形は、運搬法と背負いカゴの形に機能的に対応している。そのため、形状からサーダ・タイプ、ブッタ・タイプ、極西タイプの3つに分けた水入れは、それぞれの使用者の生活スタイルと不可分の関係にあり、水入れの商業圏はこうした習慣と嗜好を前提に編成されている。

なかでも、ブッタ・タイプの水入れは、ネパール山地において最も広く使われており、これを作る担い手が山地ヒンドゥーの銅鍛冶師カーストであった。同じブッタ・タイプでも、製法にはネワールの銅鍛冶師タムラカールが得意とする「鍛造型」と、山地ヒンドゥーの銅鍛冶師カーストがおこなってきた「接合型」とが認められ、後者の技術的段階がネワールの影響を受ける前のネパール山地の銅器の特徴であったと考えられる。

素材としての銅が、山地ヒンドゥー鉄鍛冶師(カミ)にとって新しいものだったという指摘(Höfer 1976: 363)は、(1) 各地に残る鉱山跡や銅と鉄が19世紀の主要な歳入資源であったこと

(Sever 1993: 199, Bue 1981: 37)⁷⁾、(2) ネパール西半分にタマタと細分化して呼ばれる銅鍛冶師が存在すること、(3) 彼らはブッタ・タイプで「接合型」の独特の水入れを作ることなどから支持できない。彼らにとって、新しかったのは、銅という素材ではなく、ネワールの銅鍛冶師がおこなう鍛造による深鉢の叩き出し製法であったと考える方が自然であろう。

ネワール職人の山地への進出で、山地ヒンドゥー鍛冶師の収入は徐々に減少しはじめたという指摘 (Seddon et.al. 1979: 87) は、中央部、東部など山地ネワール・バザールの歴史が古いところでは該当するであろう⁸⁾。しかし、極西部や中西部の山地ネワール・バザールは 100 年ほど前と新しく、ネワール職人の影響を直接には受けない山地ヒンドゥーの銅鍛冶師(タマタ)が生き残り、その技術伝承が維持されてきた。また、中央部や東部においてはネワール職人の商店主(サフ)化や企業家化に伴って、減少した職人を山地ヒンドゥー鍛冶師によって補充するという、復帰ないしは新たな進出現象もおこっている。

今後の課題は、ブッタ・タイプの水入れの「鍛造型」と「接合型」の分布と作り手の分布を工具や実際上の技法を含めて調査すると同時に、インド製の銅板がいつから使われるようになったのか、それは技術上どのような影響を与えたかを明確にし、上記の見通しを検証していくことにある。さらには、他の素材を扱う業種についても、同様のアプローチによってネワールの職人と山地ヒンドゥー職人との相互関係を解明していくことができると思われる。

注

- 1) 田村善次郎 (1975: 3) によれば、東ネパールのカブレパランチョーク郡ワルティン村では、木器を作るカーストはカミの中でも、とくにチュナーロ (Cunaño) と呼び分けられている。また、モイサラ (Moisala 1983: 236) はグルン地域での太鼓の胴は、皮張りと同様に皮細工師カースト (Sarkhi) によって作られるという。これらの指摘からも明らかなように、カースト名は地域によって異なるうえ、カーストと職業の対応は固定的なものではなく、あくまで典型である。
- 2) 藤井ほか (1984: 28) は、パーシー語またはバルシー語はガイネの固有の言語であると述べる。だが、これはネパール語にある一定の音節を加えて作った単語で会話する隠語であり、語順や文法はネパール語に準ずる。2 人の楽師から「マティソフの基礎 200 語彙」を録音したが、一人の回答にもう一人が「それでは解ってしまう」と別の音節を加えて言い直すことがたびたびあった。彼らのパーシー語を使う上での最大の関心は、いかにすればカースト外の人に伝わらないかということにあるといえよう。
- 3) 田村真知子 (1991: 16) によれば、鋳物の材料金属として使われるのは、銅と亜鉛の合金ピットル(黄銅)と銅と錫の合金カーンス(青銅)であり、銅に対する亜鉛と錫の比率は 25%を基本に、経験とカンで決められる。また、錫の比率が高いカーンスをとくにチャレシュとも呼び、銅合金はダロットと総称されるという。コッテージ・クラフトの経営者によれば、金属はまず鉄金属 (loho dhafu) と非鉄金属 (aloho dhafu) に分かれ、5 大金属 (pača dhafu) すなわち金、銀、銅、鉄、真鍮(黄銅)という分類や 8 大金属 (asta dhafu: 5 大金属 + 錫、鉛、銅) という言い方もあるという。日本では銅と錫の合金は錫の比率が高いものから低いものへ白銅(サハリ)から青銅へと名を変える(朝岡先生のご教示による)が、ネパールでは錫 16% のカーンス (kañś) をバルバリ (palpali: バルバ風)、錫 28% のカーンスをチャレス (chares) と呼んで区別するという。
- 4) B 村は、故田村真知子さんが石井先生の紹介によって調査をはじめていたところである。その後、「職人文化と近代化」研究会でも予備的な調査をおこなったが、調査地が B 村であることを私が知ったのは、現地に向かう車中にシャム・バハドゥール・ダンゴルさんから聞いてのことであった。石井先生には事後報告となったことをお詫び申し上げたい。

- 5) 収集した古いブッタ・ハネコ・タイプの銅製水入れを見て、ネワールの女性が「上等なバルバリ・ガーグリですね」といったことがある。その時は気にも止めなかったのですが、ブッタ・タイプの水入れの別名としてバルバリ(バルバ風)という呼び名もあるのかもしれないが確認できていない。この場合、水入れは銅製であったので、注3)で述べたバルバリ(青銅製)の使い方とは違うことになる。
- 6) バルバ郡チャハラでは、山地ヒンドゥーの銅鍛冶師(タマタ)により、ブッタ・タイプの水入れが作られている。ここでは鍛冶場を観察し話を聞くのみで、作業や製品を見ることができなかったが、「接合型」の水入れが作られているとのことである。
- 7) ブー(Bue 1981: 37)によれば、銅は11世紀以来ネパールの山地各地で採掘されインドに輸出されていた。19世紀はじめにおいても、銅は国内で自給できていたという。
- 8) セドンほか(Seddon et. al. 1979: 87)は「インドの銅合金の大量生産品は、1920年代終わりまでネパールに入ってくることはなかった。だが、これ以降、インドにおいて(ネパールの)伝統的な水入れのデザインがコピーされ工場ベースで安い合金を使った水入れが大量生産されるようになると、タンセンのような工芸産業の町はほとんど一夜にして崩壊した」という。ここでいう「伝統的な」水入れが、本稿でのサーダ・タイプかブッタ・タイプにあたるのかは明記されていないが、パタンの工場のプレス機械はおそらくインド製でありサーダ・タイプの水入れを指すと思われる。だとすると、半機械製ではなく手製のブッタ・タイプの水入れの需要はけっして小さくなく、またサーダ・タイプの水入れの大量生産にしてもあくまでプレス工程のみであり、銅器作り産業は今なお存続しているといえる。むしろ、私は水入れの贈答の習慣は近年の経済力の高まりとともに活発化しているという印象をもっている。

付記

現地調査にあたり、財団法人サントリー文化財団の1995年度研究助成「近代化にともなうアジアの職人文化の継承と発展」(代表 新津晃一)を得た。バジャン郡の調査は環境庁の「Community-Oriented Development Ecology Project」(代表 大塚柳太郎)により実現できた。「職人文化と近代化」研究会にさそってくださった故田村真知子さんをはじめ、友人で共同研究者のLok Bahadur Baralさん、Shyam Bahadur Dangolさんにはたいへんお世話になった。本稿の元になる草稿は、「職人文化と近代化」研究会(武蔵野美術大学、1997年7月6日)で発表したのが、研究会のメンバーならびに石井博先生から貴重なご指摘をいただいた。記して感謝申し上げます。

引用文献

Bista, Dor Bahadur

1980 (1967) *People of Nepal*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
(『ネパールの人びと』 田村真知子訳、古今書院)

Bue E. Lo

1981 *Statuary Metals in Tibet and the Himalayas: History, Tradition and Modern Use*. In *Aspects of Tibetan Metallurgy (Occasional Paper No. 15)*. Oddy, W. A. and Zwalf, W. (eds), pp33-67. British Museum.

Caplan, Lionel

1975 *Administration and Politics in a Nepalese Town*. Oxford University Press.

Central Bureau of Statistics

1993 *Population Census-1991 Social Characteristics Tables Vol. 1 Part VII*.

Cox, Thomas

1992 *The Badi: Prostitution as a Social Norm among an Untouchable Caste of West Nepal*, *Contributions to Nepalese Studies* 19 (1): 51-71.

藤井知昭、高橋昭弘、樋口昭、馬場雄司

1984 「ネパールの音楽職能集団・ガイネの研究：バトゥレチョール集落を中心に」『東西音楽交流学術調査報告』(研究代表者 藤井知昭)国立民族学博物館。

Höfer, Andras

1976 *A Settlement and Smithy of the Blacksmith (Kaṁi) in Nepal*, *Kailash* 9 (4): 349-396.

- 1979 *The Caste Hierarchy and the State in Nepal: A Study of Mulki Ain of 1854*. Innsbruck: Universitätsverlag Wagner.
- Hitchcock John, T.
1963 Some Effects of Recent Change in Rural Nepal. *Human Organization* 22 (1): 75–82.
- Ishii Hiroshi
1982 Agricultural Labour Recruitment in a Parbate Village in Nepal. *Monumenta Serindica No. 10: Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, pp. 40–80, ILCAA.
- 石井 博
1987 「ネパールにおけるカースト間分業体系」（伊藤亜人 他編）『現代の社会人類学 2：儀礼と交換の行為』167–195 頁、東京大学出版会。
1992 「バルパテ・ヒンズーの村落とネワールの村落」（日本ネパール協会編）『ネパールの集落』（ネパール叢書）177–236 頁、古今書院。
- Iltis Linda, L.
1980 An Ethnohistorical Study of Bandipur. *Contributions to Nepalese Studies* 8 (1): 81–145.
- 南真木人
1998 「西ネパールにククリをもとめて」『月刊みんぱく』249 号：15–17 頁、千里文化財団。
- Moisala Pirkko
1983 An Ethnographic Description of the Madal-drum and Its Making among Gurungs (Nepal). *Suomen Antropologi* 4/83:234–239.
- Seddon D., Blaikie P. and Cameron J.
1979 *Peasants and Workers in Nepal*. Vikas Publishing House.
- Sever Adrina
1993 *Nepal under the Ranas*. Oxford and IHB Publishing.
- 田村真知子
1991 「鋳ものと鋳物師」『会報』108 号：16–18 頁、日本ネパール協会。
1995 「東ネパール山地の小都市における商業活動と地場産業：チャインプル・バザールの商人と鋳物・鍛金職人」『Nepal Study Series』No. 5、日本ネパール協会。
- 田村善次郎
1975 「ネパールの民具覚書」『民具マンスリー』10 (5): 1–11 頁、日本常民文化研究所。
- Tingey Carol
1994 *Auspicious Music in a Changing Society: The Damai Musicians of Nepal*. New Delhi: Heritage Publishers.